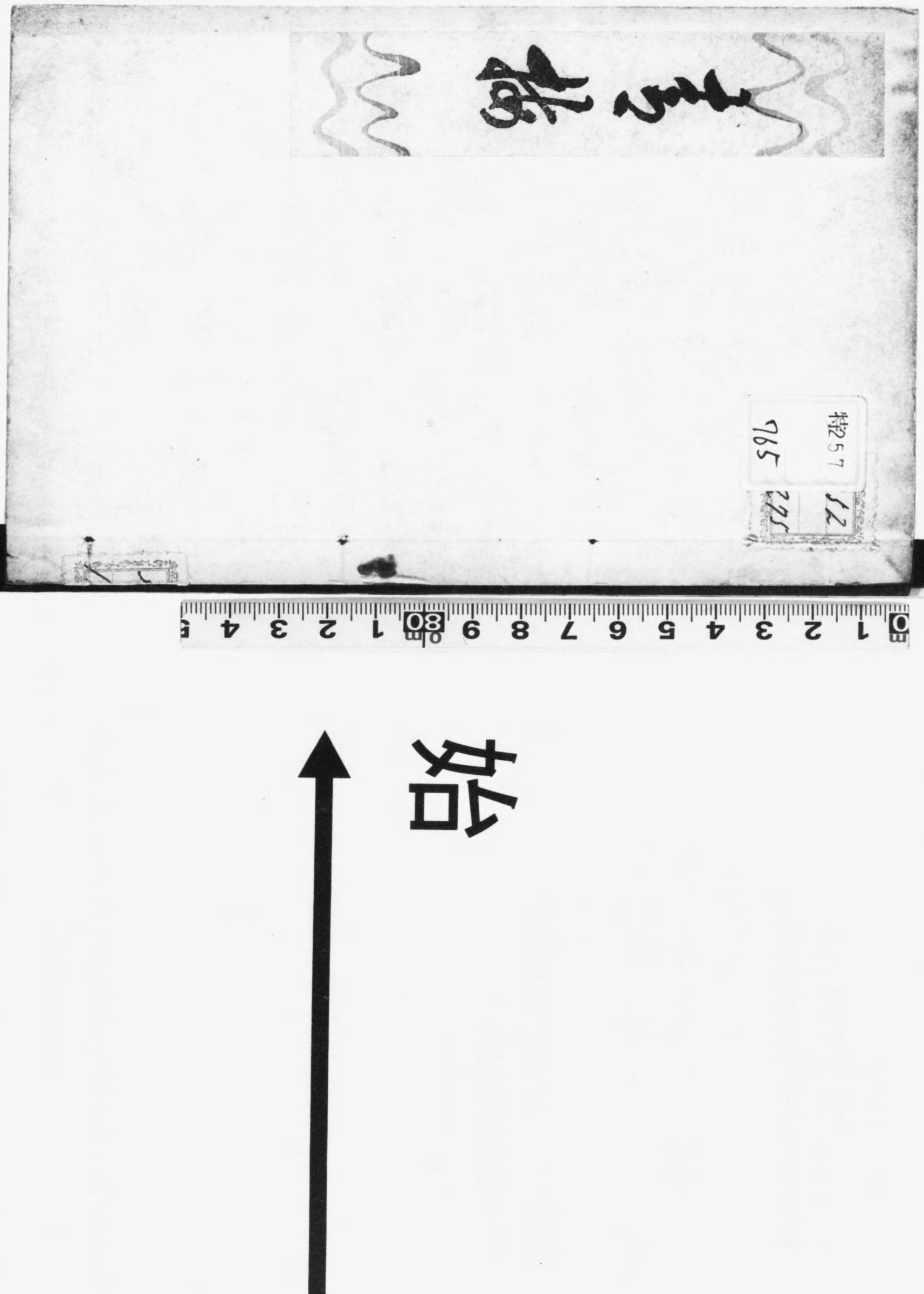
特257
765
12
225

1645
1642 #4

序

多年宿望の古今文様大鑑も漸く完成を見るに至りしを喜びて茲にまた〳〵拙句をあつめこれを『青梅』と題す、先年發表せし『阿伽の雫』『友禪忌句集』『苔の花』など何れも似よりたるもの而已なれども予にとりては其折々の思出も多ければ諸賢の御批判を希ふ可く敢へて此集を成す。

昭和十一年皐月

洛西　梅の宮池畔　於而　芦廼家誌

清江

古今文様大鑑

題字と序文目次

第一巻　菊池契月先生
芭蕉堂蘆水宗匠
自序　上野清江

第二巻　金剛巖先生
茂山千五郎先生

第三巻　清岡長言卿
醉夢庵登門宗匠

第四巻　神坂雪佳先生
黄雲亭竹童宗匠

第五巻　澤田宗山先生
百世庵三圓宗匠

第六巻　千宗室宗匠
田中美風先生

第七巻　高橋道八先生
和田花曉先生

第八巻　和田不二男先生
洗心庵宗康宗匠

第九巻　出雲路通次郎先生
猪熊淺麿先生

第十巻　冷泉為系卿
山鹿清華先生

跋　歌屋小西大象先生

昭和九甲戌歳八月

霜雪をあのきてむすふ

實梅かな

春

慶賀

慶事ある家に咲きけり福壽艸

賀を祝ふ莚に赤き頭巾かな

新年

新らしき年の封を切る初日出

年玉や無事な便りも添えて來し

雛鶴や老木の松に差す初日

船歌の節も豊かや春の海

木津川の砂の白さや登り鮎

初鶏や杉間に見ゆる神路山

川獺の魚祭る夜や星まばら

蛇穴を出たり去來の墓つゝき

渡し守桃咲く家の古事を云ふ

牛を放つ桃林何里茜さす

初午や幕新らしき野の社

積善の軒に賑はし燕の巣
四拍子の冴ゆる廣間や舞始
電線に燕の腹の並ぶ見ゆ
日は落ちて凧のみ高く昇る哉
鶯やすり餌の鉢の椽にある
花七日何はなくとも酒のこと
宣傳のポスター吹きけり春の風
鶯や日當りのよき土師の庭
桃の花軒に米ふむ男かな
此村に長壽の多し桃の花
桃の咲く藁家の脊戸や襁褓干す
花咲くや杉間に見ゆる奥の院
音もせて開く柴折や月おぼろ

默々と畑打つ人や夕雲雀
田芹生ふ流れに遊ぶ家鴨の子
威風堂々馬車自動車に年の禮
稜威尊く千代田の松に差す初日
子福者の母とも見わす松の内
横雲の上に昇るや奴凧
歌心動き初めけり山吹に
青苔の碑文すれ〳〵散る櫻
寸馬豆人富士は初日に偉大なる
輪飾や家重代の具足櫃
別莊の垣の外なり蕗の臺
鞠垣は古りし儘なる柳かな
芽柳やくれに數打つ鞠の音

妙見堂軒かたむきて野梅咲く

雪解けて筧の水の太りたる

國寶の佛像ある寺梅薫る

丹塗の祠も朽ちて野梅咲く

化粧部屋の窓に一輪匂ふ梅

雞のあさる門田の根芹雪解けて

牧場を廻る小溝や蛙の子

牛小屋のうしろに赤し藪椿

シヨウインド玻璃器の慈姑芽を吹きて

せゝらきの底すれ〳〵に椿浮く

別莊の垣根廻りて春の水

茜さす春野に鍬の光りかな

黄昏の木の間に白し初さくら

小唄きく浮世小路や朧月

君か代や雪に初日の照り映ゑて

椿点々藪の中なる詩仙堂

若水となりて水道のこほれけり

常はとも一つは召せや屠蘇汲みて

鶯や庭に寂ひたる鞍馬石

藁屋五戸梅点々と咲いてあり

藻の下にひそめる魚や春寒し

鶯や物靜かなる醫師の妻

拭込みし柱もをしく出代りて

土藏こほつ埃り街路も春寒に

東風吹くや兒はすや〳〵と巷に寢て

春袋幸多かれと縫ひ終る

海苔の香や海を見渡す四帖半

春の水流れぬ程に流れけり

太平や樽を枕に花の下

日時計の針に胡蝶の止り居て

坊に來て掟書讀む日永かな

浪きらり〳〵初日の昇りけり

涙照らす日本晴の初日かな

下萌や渡る土橋に雞の糞

田樂の振り見る都踊かな

國賓京に入る日を都踊哉

一輪に春知る梅や机先

椿大樹花のぼとり〳〵落つ

寺の壁白きに椿赤きかな

旭光照波

那智田樂

戀猫のけろりと夜明け戻りけり

鑿の音ばたりと止みぬ間炊に

香炷いて遺墨偲へは春の雨

千年の樹の懷や孕み鹿

蒲公英や鼾かく子の袂から

春の水繪卷の樣に流れけり

舊情を温めて利茶の客主人

參道の粉雪かき分て神司

瑞垣も半は埋れて春の雪

松盡し母娘揃ふて彈初め

又一つ殖えて目出度し祝ひ膳

護花鈴に醍醐の昔偲はるゝ

木地爐椽釜は初代寒雉かな

還夏

暦

なこやかに草吹く風や孕み鹿
青き踏む赤き鼻緒や露濕り
四方山の朧見渡す露台かな
用もなき友引止めて松の内
大路小路泥田の如し雪解けて
露次扱けて都踊りの戻りかな
硯屏は砧青磁や福壽艸
六十路來て未た是よりそ春の旅
暦手の茶碗味よし花の菴
思へ人辛苦はこゝに田草取
卯の花に無住の菴の暮殘る
葉櫻や半かくるゝ多寶塔
短檠の消ねなんとして夏の虫

渺茫たる海上涼し夏の月
旃檀の二葉芳はし初端午
文展の屏風見榮ねつ祇園の會
明笛の水面を辷る夏の月
蚊柱や京より戻る葱賣
國賓の京に入る日や祇園の會
夏帽の草笛の音や歸省の道
學窓のポプラの色も初夏に入る
瀧船待つ湖南の岸に風薰る
漁灯の影引く海や五月闇
村小町茶摘み中間に噂して
天橋を股から覗けは風薰る
船造る大工の軒や柿の花

自動車の埃り無慚や法鐸花
獨活畑魚板響きて暮れんとす
海苔の麁朶干瀉に細き汐一路
日盛りの箱根八里は歌もなし
大きう搖れる藻の花小魚釣落す
皮を干す村に立派な昇り鯉
納屋の戸の半は朽ちて毛虫這ふ
公職を辞して晝寢の高鼾
月の出て篝火くらき鵜船かな
笹しきて齒形の入りし鮎吳れし
涼しさや瀧友禪の浴衣着て
青芒帝展の書稿半ほど
捨舟の中に藻の花咲いてあり

岐阜より

野球場の杭も打ちたる夏野哉
日盛の寢牛に麥の埃りかな
秋近く女房姦し最合井戸
燕子花伊勢物語讀む窓に
藻の花や夕陽差したる山の池
祟るてふ野中の井戸や草茂る
ばち〳〵と話折込む扇子哉
黑い蝶白い牡丹にとまりけり
富士詣霧の雫や笠のうら
旭に映ゆる富士を眞向や風薰
水馬玉垣結ひし神の池
一國の城もかたむく絹團扇
座禪像の尊き寺や風薰

瀧車中

明易き夜を姦しき雨隣
夏の御堂今日も臨地の講師來る
諫言の耳には入らず絹團扇
夏帽の壯擧を一村見送りて
炎天や赤目へ走る馬車喇叭
蝸牛や無住の菴の破れ垣
草の戸に餘る榮花や洗ひ鯉
蓮の香や未た邪氣持たぬ朝心
君思ふ夜や更けぬるを火取虫
戰友を訪ねは藁屋に柿若葉
風薰る湖上はるかや眞帆片帆
月映る玻璃器に凉し冷奴
投網に鮎潑溂と洗ひ堰

金澤方面

夕映えの青田に金蛇ひそむ見ゆ
小舞子の眞畫を合歡の盛りなる

片山津にて

蚊柱や温泉宿の女中立話し
握る手を透けて螢の光り哉
日盛りを毒艸の花白き哉
我影も少さき濱や日の盛
炎天の砂に動かぬ虫の髭
浦つたひ松点々と月凉し
江の舟に釣する人や行々子
尊さや神馬嘶く若葉かけ
風鎮の壁する音や葉の櫻
井戸端に團七縞の浴衣かな
水郷の夜半を頻りに鳴く水鷄

黄桔梗の紅摺もある團扇哉
燈龍に灯を入れてから椽涼し
旱して瀧に水なき岩間寺
蟬鳴くや晝さえ闇き女人堂
頭陀袋かけし像あり栗の花
金よりも大事にしたり宗旨判
宗旨判持ちて旅立つ男かな
人格は雇主も認む宗旨判
百日紅墓所の土塀の崩れあり
日盛りを鎌首立てゝ蛇走る
千年の樹の懐や湧く清水
麥秋の埃りにうとき夕陽哉
木香高し青葉の中の宮柱

化粧部屋の窓に咲けり鹿子百合
涼しさや蘇洞門に響く瀧の音
眼の届く限り青田を嵐笛鳴る
蟬鳴くや晝も涼しき天幕村
夕立のして大川の片濁り
飢に明け戻る漁船や夏の海
奇巖紺碧東尋坊や雲の峰
雨乞や闇照らす灯の峰つたふ
此旱主の住むてふ池涸て
斷食の高僧幾日雨を乞ふ
陽時計のある庭廣しけしの花
沼尻の土和らかく鳴く水鶏
芥子の花咲く後園廣き家構へ

東尋坊にて
仝

西陽差す驛の茶店の日覆哉
蚊の唸る籔蔭の家うす闇き
池渡る蛇物凄し炎天に
燒パンにミルクも添えて夏の朝
嘶きは勝を誇りやくらべ馬
尋ね行く吉野の奥や苔清水
出來事の話に更けて門納涼
風爐の茶や露路笠を打つ雨の音
笹粽配るも嫁の誇りかな
木下闇記念堂建つる鑿の音
暮迫る庭も明るし白牡丹
片手では出來ぬ牡丹の話し哉
琴棋書畫温泉宿賑はし梅雨最中

兒の寢顔外から覗く蚊帳かな
土用東風島の女は髪を梳く
絽蚊帳釣る文金島田の女かな
古備前の壺に味よし夏切茶
山駕の休む谷間や百合の花
泥つかぬ聲の美くし田植歌
笠脫ぐは幼な馴染や田植人
悠々と土手行く牛や雷遠し
茶の爲に汲むや吉野の苔清水
靜寂の大氣破りて閑古鳥
遊行寺の柳の下の清水かな
五月雨や湯女を相手の小酒宴

大正元年九月　明治天皇陛下奉悼謹吟

實塚にて

落日のあともまばゆし夏の暮
轜車過る音悲しくも秋の夜半
七千萬虫鳴きつくし夜の明くる
萬木も露に重けや夜もすから
御陵工事電燈輝く草の露
特効の湧湯の噂さや秋日和
そよ〳〵と吹くも氣味よき秋風に
袖はらまして橋渡りゆく
斥候の敵地に聞くや轡虫
卒塔婆倒れ風凪きて蜻蛉高ふ飛ふ
貸傘の用意もしたり紅葉茶屋
茜さす穴居陣地や紅葉散る
夕紅葉落城日々に迫る哉

簾蔭に水車の音や渡り鳥
温泉日記書く窓先や渡る雁
秋風や拾遺歌集をつゞる尼
太刀魚や弓師の家の小酒宴
后の月水の面に見る雲のあし
詩作する窓の灯や秋の雨
病む窓のカーテン白し秋日和
色紙田も黄金の色や豊の秋
瀬々良岐に小魚の群や秋の水
蜩や是より十町奥の院
秋の雨寂光院の夕灯し
尾越鴨ふけ田の月を横きりて
徒然や渡舟待つ間を鳴子引

半部に琴の音洩れて秋の行く

鬼灯や小驛の柵に色榮えて

鐘の音の湖上を辷る秋の風

元成は珍重かられて種瓢

文展の書に秋の日の迫りたる

重陽や衞士も一首を奉る

詩作する窓の灯や秋の雨

大正七年九月母死去の際

簑虫のちゝと鳴く夜を母逝きて

集印帖に高雄の紅葉はさみけり

無念無想心の底に露の音

朝顔に恥かし妹のみたれ髪

落柿舍に荻は戰きて秋の行く

親友の文展入撰を祝して

夕日さす紅葉見榮わつ屏風岩

罠に落つ鼠の音や秋夜更け

水害の悲報聞く夜や肌寒き

野分して米暴騰の噂なと

新蕎麥や伏家に一茶の高笑ひ

あらそひし時もありしを落し水

長き夜も書き盡したり旅日記

障子張る驛の茶店や渡り鳥

勇ましき鍬光帽影すゝきはら

水かれて底する井戸や秋暑き

羽蟻立つ臼の干割や納家の軒

鍬洗ひ〳〵門田の月も見て

飛行機の霧出て霧に隠れけり
浮雲けなし土橋渡れば糸瓜の戸
稍ありて詩箋も露にしめりけり
夕月や銀波漂ふ佐渡の海
遺稿見る窓木犀の匂ひ來し
牛つなく柿に夕陽のあか〳〵と
大原や呂律の川に散る紅葉
神主は半農にして柿自慢
柿熟れて苦むす屋根に二ッ三ッ
白萩の飜れ咲くなり水車裏
秋の雨少さき柩の野路を行く
面白ふ甚句唄ふて勝角力
秋出水村橋落ちて渡舟呼ぶ

吟行の古墳を訪えば露深し
旅に寢て詩腸練る窓百舌の鳴く
稲妻を吸込む渦の鳴門かな
炎天や潮浴ひる子の砂に這ふ
藁家五戸柿に夕陽の差すつゝみ
鴨涯の絃歌は絶ねて天の川
歌硯菊の匂ひも摺り込みぬ
露深し釜の湯沸る吉野窓
琵琶を彈く軒場は朽ちて月の影
姉妹の汲む汐桶や月の影
丹精は葉にも見えけり菊合
法の灯の幽かに見えて秋の雨
國寶の鰐口もあり萩の寺

柿点々葉屋まばらに書の如し
贈位ある噂さも高し菊の主
千祖家の箱書露とある茶杓
不寝番の灯は淡くして露時雨
草紅葉菴室迄の道細し
縄張りの隣同志や木の子狩
猿酒や岩の凹みの溜り水
氣樂さは糸瓜花咲く垣隣り
尊さや蘇旛燦と秋晴るゝ

御大典

秋晴や千代田の松に鶴の聲
短冊も添にて呉けり菊一と枝
石崖も崩れしまゝや蓼の花
盂蘭盆や若かりし戀語る刀自

冬

秋日和棟木納むる槌の音
新澁を引きしつゝらの匂ひ哉
轡虫鳴くや淋しき古戰場
星月夜早駕走る松縄手
別莊の裏は花野の廣さかな
宮守の白衣に露の時雨けり
千年の杉の木立や鹿の聲
送り來し苞の雫や寒の鮒
鶯子啼や茶巾干したる四ッ目垣
落葉して書院の窓の明るさよ
白藏主月落ちかゝる枯尾花
鶴も羽を雪におさめて松の上
身の上の話しに更けし炬燵かな

座蒲團に殘る温みや宴果て
花嫁の部屋に鹿の子の蒲團かな
菊枯れて枝に名札の殘りけり
降る雪に行方を迷ふ佐野のくれ
佗しけに茶の花咲きぬ裏畑
香炷いて寫經ひまなし冬籠
それ鷹に谷千丈の嵐かな
口切や天明釜に湯の沸る
紺足袋や隣のお三十文半
柚子大樹厨の窓を覆ひけり
五十年孤獨の女柚子しぼる
活て居る者とは見えぬ海鼠哉
鴨川の情話に更けて鳴く千鳥

水仙や物數云はぬ座の締り
電燈は只燦として去年今年
敷嶋の道くらからす雪の宿
様々の隱し藝もあり年忘
雪降るや天長地久を祝ふ日に
米は倉に積んで氣易し春隣
最負から贈りし樂屋蒲團かな
染見本添ねてありけり衣配り
積む雪に瀧車も埋みて不知親
水鳥や船高ゆれて比良颪
灰色に海は暮けり鳴く千鳥
菴佗ひし寛の水も涸々に
福引に客足繁し年の市

撫て居つ話も丸き火鉢哉
なす事はなして氣易し年の坂
里近く雪車引く唄に暮迫る
銛受けしまゝ逃て行く鯨かな
勅題の意匠こらして年の市
あの人が踊るもおかし年忘
乳貰ひの行すむ門の寒さ哉
鶺鴒や御陵の池の水澄みて
校庭の遊動圓木霜ふかし
木枯や狐狸の住むてふ菴荒れて
赤き實にひよ鳥の來る野寺かな
狼の遠吼え凄し寒の月
茶の花の夕陽にうとし三十三才

物凄し玄月落ちて木兎の聲
巖頭に嘯く虎や寒の月
三十三才蜜柑畑に夕陽さす
頻り鳴くましらの聲や崩築
和氣堂に滿ちて賑はしクリスマス
朝霜や妻は田舍の愚痴を云ふ
俳趣に我意を得たり冬の山
花八ッ手數寄屋の窓を覆ひけり
炬燵から孫を相手に鳩ポ―ポ
跳返す竹の勢ひや今朝の雪
水仙や陽當りのよき骨董店
干菜釣る煤け障子や刀自か軒
小春日や小松の丘に統監旗

霜踏んで土地計畫の杭を打つ

忙中も炬燵はなれぬ猫と我

帳綴見出して嬉し夷紙

禪院の名石寂ひて寒の梅

紙漉の小屋閉しあり冬の梅

水仙や障子一ばい陽のあたる

美くしきカードくれけりクリスマス

四ッ目垣山茶花照す坊灯し

棚の布袋炬燵の上や煤拂

比良颪芦は戰きて鴨の立つ

掛取の鬼とは見ぬ女かな

枯蓮や菴室迄は小半町

冬の川底に光りし身無貝

茜さす枯野に高し塔の影

ころけたる筆に立ちけり冬の蠅

凧や演習の砲車堤行く

早咲の梅や夜市の話し種

湖に望む俳場や枯芭蕉

霙降る中に捨兒を呼ふ太鼓

比良の山雪にかくれて三十三才

淋しさや枯野を僧の只一人

古蹟訪ふ遊行の柳も枯果てし

京名所の部

北嵯峨　厭離菴柳の清水汲む尼僧

鳴瀧　羽蟻立つ印金堂の軒朽ちて

島原　朧月禿の出たり冠木門

伏見　蛇穴を出るや雑木の末社裏

仝　初午や粘土つゝきにある末社

厭離菴　歌讀みの烏や苔むす定家の碑

田山　朝櫻ベンチに殘る折のから

洛西　大澤の池の汀に散るさくら

岡崎　獅々吼ゆる動物園や雲の峯

知恩院　大寺の木魚の音や風薫

加茂　責馬の鞭に落散る若葉かな

清水　仁清と乾山の碑や青葉かけ

栗田　楠若葉青蓮院の土塀高く

東山　稚兒か池凄さ撮りて雲の峰

鞍馬　太刀跡の岩ものすごし夏木立

北嵯峨　苔の花名古曾の瀧はあと古りし

東山　夏木立法垂の岩屋に涌く清水

洛西　子子や壬生に名高き尼ヶ池

鳴瀧　せんまいのほうけしまゝや五智如來

北嵯峨　祇王寺に行く近道や露涼し

松尾　苔寺の寂ひもましけり麥の秋

洛西　風薫る双か丘の袖屏風

市中　薫風や放送局の塔高き

叡山　炎天や吐く息せはし九十九折

仝　宿院に一夜明かしてほとゝきす

木幡　黄檗に菊舍の句碑や新茶時

黄檗　普茶料理饗應す寺や茶摘歌

淀　摺れて行く芦間の船や蜻蛉飛ぶ

愛宕　清瀧に客のこみ合ふ殘暑かな

山端　石伏魚汁や川沿の宿柿若葉

梅の宮　鯉はねて月くたきけり神の池

神泉苑　雨乞や神秘を傳ふ幣の風

一乗寺　詩仙堂は只寂として夏の月

洛西　北嵯峨や芒の中に尼二人

木屋町　葉柳を潜り馴れたる燕かな

梅の宮　神園は雨に寂ひたり燕子花

叡山　夏木立七堂伽藍の夕灯し

淀川　苫船の灯火うとし鳴く千鳥

空也堂　鉢叩き瓢の菓子を子にやりぬ

洛西　年老いて師走を余所に梅の宮

木屋町　丸窓に二人の影や玉子酒

島原　餅搗の囃子賑はし廓のくれ

加茂　夕立や大原女走る御幸橋

洛西　夕立や筏を流す西高瀬

梅の宮　池中亭の影も映りて杜若

洛東　南禪寺松の一路を蟬の聲

平野　田樂の團扇の音に散る櫻

眞葛菴　突あけの窓より花の散り込みぬ

高台寺　花咲くや釜の湯沸る吉野窓

河原　衣洗ふ加茂川の水温みけり

花見小路　小路行く二人の影や月朧

洛西　揚雲雀御室の塔の低き哉

太秦　撮影所の女優の部屋や春灯し

嵐山　花吹雪千鳥か淵に浮く茶船

伏見　初午や献燈燦と末社まて

市中　右京左京柳黒みて雨のくれ

北野　神馬嘶き白砂に紅梅眞さかり

洛西　藪蔭の浸々道や落ち椿

朱雀野　尼ヶ池昔はしらす蛙の子

東福寺　兆殿司の猫に名高し涅槃像

洛北　麥二寸鞍馬に碑石探る日に

伏見　赤土の山の凹みや殘る雪

動物園　廣けたる孔雀の羽根や春の風

鞍馬　雲珠櫻沙那王殿の古事偲ふ

八坂　舞妓連れて醉歩の人や春の月

大宮御所　御殿　蘗や仙洞御所の庭の寂ひ

高台寺　闌更の碑は苔むして春の雨

大堰川　若鮎の腹のきらめく日筋哉

二尊院　本尊は釋迦と阿彌陀や紅葉寺

妙喜菴　袖摺の松は古りたり木地爐椽

保津川　岩繡ふて若鮎登る早瀬哉

西芳寺　苔寺の庭に美くし春の雪

島原　島原の情話に殘る柳かな

洛西　野々宮の古ゐ振りや竹の秋

伏見　鶯や椽に干したる土人形

黄檗　普茶料理魚板響きて梨花の散る

佐門莊　歌石に情緒溢れて春の雨

北嵯峨　春雨や籔の中なる厭離菴

小塩　藁ふきの仁王門佗ひて花の寺

伏見　弟子連て野鍛冶も叅る一の午

梅の宮　樓門の水に影あり燕子花

仝　梅日和夫婦て叅る跨け石
仝　池中亭の影を映して水馬
鞍馬　この僧にこの勢ひや竹を伐る
仝　山刀て竹切る僧や鞍馬寺
洛北　蓴菜に捨船もある御菩薩池
鞍馬　夏木立僧正か谷の朝灯
山崎　妙喜菴筍飯に茶後語る
鷹ヶ峯　春雨に主客語るや大虚菴
北野　八つ棟を拜せは梅の薫けり
洛西　鳴瀧や砥石切出す五月晴
桂　春風や桂離宮のわすれ窓
五條　扇子折る風も涼しや御影堂
嵐山　友禪の振袖續く智恵貫ひ

鹿苑寺　金閣の池に映りて水ぬるむ
中山神社　御社の庭に茂りて二葉艸
太秦　日覆してキネマ女優の化粧部屋
北嵯峨　物さしの目を切る軒や秋日和

◆つれ〴〵艸

大正九年二月金澤に友禪齋墓所發見

雪解の加賀に友禪展墓なと
御大典の節　梅薫る村主基田の榮を得て
芭蕉堂北野奉額　茜さす春野に鍬の光り哉
西陣佐々木氏令閨悼

鶯の頻り鳴く日を名殘にて
鎌田松綠氏筆子孃を悼

思出の小袖に梅の散りて來し

謠曲百萬をうたひて

子の爲に狂ふ女や嵯峨の春

雨森菊太郎氏母堂の靈前に

春雨や菴は逸話に夜の更ける

鎌田筆子女石塔供養に

落椿籔根の流れ堰くまても

枯魚堂建碑式　雪積んていよ〳〵青し峯の松

大正十年二月名古屋古田雪香氏令閨弔

飛梅の跡に匂ひの殘りけり

三月ある人の襲名の披露に

花衣親の光りの身に添ひて

三月九日高隆會伊勢參宮をして鳥羽港にて

麗日や車窓から見る眞帆片帆

二十年ふりにて愛宕山へ參り清瀧にて

岩を切る水に紅葉の散りて來し

四月生駒山へ參りて

滿員の綱索鐵道山朧

宇治にて　旗ふりて渡舟呼ふ岸行々子

岡山　風薫る後樂園や鶴のこゑ

能勢妙見　樹雫の袖にかゝりてほとゝきす

南郷　船べりの凹みに螢とまり居し

宇治へ后太皇宮行啓あり

新茶匂ふ木幡の里やみきや節

なけ節や平等院の若葉かけ

山端平八　柿若葉川添床に石伏魚の汁

堺大濱　滿員の投泳臺に風薫る

松原新玉津嶋神社奉額

雨乞や神秘を傳ふ幣の風

和歌山城　古城趾の偉大を誇る楠若葉

三越光琳忌　旅人の汲めども盡きぬ清水哉

吉見氏買宅を祝して

家も名も咲き廣こりし牡丹哉

北垣靜處男追悼會　主逝きて牡丹の花の崩れけり

六月杉本氏男子出産を祝す

菖蒲湯や發育のよき男の子

廣田八助翁を弔す　香炷いて居士偲ふ夜を五月雨

吹田にて　皮を干す村に立派な幟哉

和田可月氏弔　藻の花に釣落す魚の大きさよ

六月下旬吟風社吟行北野より嵯峨方面鳥居前にて

友待つ間の句作も若葉蔭に居て

等持院　土ほめきに蛇の出てあり鬼薊

若竹の窓明り顯山筆も見て

鳴瀧妙光寺　羽蟻飛ふ印金堂の柱かな

泉谷西壽寺　尼寺の筧に蛙雨を呼ふ

知命の句に　五十鈴川明易き夜の顔洗ふ

丹女會手向　白百合の一輪咲きの匂ひ哉

伏見依水園にて青雲社納涼謠會

山青く水白くして涼しけれ

月の前柳の戰く涼しさよ

吉田勘藏氏母堂を弔ふ

蕗の葉に青梅落つる音のして

登門宗匠令閨悼　五月雨の夜を淋しくも鉦のこゑ

十年五月惠續會江州多賀神社參詣

朝詣ふて帽子に藤のさわりけり

彦　根　寂　として　天主閣に風薫る

六月四日澤渡美津子女悼

謠ふ聲きこゑぬ夜なり五月雨れて

舞姿未た眼に殘る夏の夜半

六月廿四日山河ひろ子女悼

鉦の音もしめる思ひや五月雨

青梅の落ちて儚き思ひ哉

六月澤渡氏寺町今出川南轉居

祝　向直す窓の氣味よし五月晴

丸惠會宮津行き　涙靜か天の橋立風かをる

凌雲社大會を祝して

垣越して一本目立つ雞頭哉

親友弔　君逝きし夜半や蓮實頻り飛ふ

近江來迎寺へ參詣して

秋晴や門を出れは湖見ゆる

京都圖案會雜誌發刊を祝す

咲き初むる菊一輪の香の高き

月本紫陽氏息の死を悼む

虫鳴や思出多き乳母くるま

月見に行きて　櫻紅葉峰の一字に畫の月

居待月早一順の句も出來て

村上信一郎氏令孃の死を悼

跡に香の殘りて赤き蓮の散る

菊見の席にて　歌硯菊の匂ひも摺り込みぬ

菊の酒汲めとも盡きす集ふ友

枯魚堂祖の靈前に奉る

入日したあともまばゆき彼岸哉

白蓮の散りても殘る匂哉

大正九年六月廿三日知命なりしかは

短夜の顔洗ひけり五十鈴川

十月十五日瀬川曉星氏悼

月今宵君の在ますは語らんに

郊外　色紙田に金の砂子や豊の秋

大正十一年九月十二世芭蕉宗匠入菴を祝して

十二葉いとゝ擴こる芭蕉かな

大正十二年九月一日東京地方大震災

月凄し罹災の跡に子を尋ぬ

震災の大施餓鬼あり萩の寺

罹災者の行手に百舌島の頻り鳴く

鳥取縣下大水害　橋と云ふ橋は流れて秋出水

中田景雲堂の令閨を悼む

佛燈の消えなんとしてきり〳〵す

八月金剛謹之助翁の靈前に

桐一葉散りて天下を淋しふす

枯魚堂の魚ひゝき終刋感想

秋晴の空に魚板のひゝき哉

本家三年の法要を營まれしに參詣して

源を探れば溪の紅葉哉

聚秀會にて瑠璃溪に行く

岩潜る水の清さや散る紅葉

三會一行と江州永源寺へ行て

見上るも見下すも皆紅葉かな

鰐口の音色も寂ひて紅葉寺

九十九折溪をつたふて散る紅葉

中塚一杉氏帝展入撰を祝して

秋の山一本目立つ杉のあり

伊藤晃珠氏の入撰を祝す

垣越して匂ひの高き黄菊哉

昭和二年一月奉悼　天地も閉して闇し年の春

轜車軋る音も身にしむ餘寒哉

奉る言の葉もなし國の春

百八の鐘も悲しき餘寒かな

靜枝忌　麗日を君の在まさは語らんに

鶯や遺墨の匂ふ法の庭

春雨に散る花をしゝ菴の窓

江州雄琴　温泉の窓に見ゆる白帆や風薫る

伊勢　初鶏や橋を渡れば神路山

初釜の心の底のゆとり哉

昭和九年十一月菊池契月先生帝室技藝員祝

菊薫る外國々の果迄も

池に映る初日の影や鶴の聲

長嶋梧曉氏母堂悼　菴淋し氷雨降る夜を鉦の音

昭和十年呉服新聞の初刷

呉　呉竹のみとり色濃くさす初日

服　服飾美京の誇りや松の内

新　新柄に人氣集めて藏開

聞　聞く事は皆延喜よし賣初

社　社頭には鈴の音絶えす初詣で

鳥居ふさ女悼　あゝ悲しゞま破りて椿落つ

梅嶺居芳春氏銀婚式祝　雛棚や調度品の銀金具

八千代迄契りは深し玉椿

見香菴宗匠の一周忌　捻香

春寒に心は厚き圓居かな

福知居士五十年忌を營まれしかは

五十年夢とすきたる餘寒かな

たらちねの過きにしあとは小車の

早や五十年も廻る今日かな

昭和九年三月露城翁弔吟

菴古りて花散るあとの淋しさよ

同九年六月十七日知恩院本山にて友禪齋の二百年忌を營みて

謝恩碑に寂ひも增しけり苔の花

廣瀨治助翁の偉業を讃えて

世に誇る京友禪や更衣

小生の厄年記念に集めし百八雅撰の故人を偲ひて

百八の風雅男も二十年に

半は佛となりにけるかな

村上春彦氏の博士號を得られしを祝して

名月や千筋に光る山はなれ

鳴瀧植木商奥田音吉氏の金婚を祝して

喜壽と古稀揃ふ菴や豊の秋

一族は百人近き花野かな

大嶋菱扇堂の繁榮を祝

家も名も末ひろこりて風薫る

九年九月田中美風氏弔

風もなき夜を淋しさや一葉散る

山河四天氏星諷會催下鴨さがみや席

みたらしに冷茶も添ひて夏座敷

清々し矢竹にたまる夏の露

風死して蟬の聲のみ聞く日哉

神の森謠と蟬に夕陽さす

高島氏鳴瀧より下鴨に轉居

秋日和窓より見ゆる東山
向直す机に秋の日さし哉

九年九月六日會員關好策大人の亀岡へ本宅新築に招待せられて

新築の廣間に映ゆる秋の色

昭和九年九月廿一日大颱風の節

目標の松は倒れて今朝の秋
颱風に學ひの窓の無慘なり
倒壞の保護建造やくれの秋
颱風や名所名木吹き倒す
風凪きて村の便りを聞く日哉

學校倒壞

罪も無き兒等も無慘に風强し
戰慄の嘶し殘して颱風に

九年十月山口裕君弔

儚さを偲ふや秋の夜も更けて

九年十月十八日同志會にて北嵯峨山行き

秋晴や長刀峠の木の子狩
石竈木の葉集めて茸を燒く
山風に燒松茸の匂ひ哉
雙湖を見下す山や木の子狩
颱風のあともあわれや山の松
倒れたる松暴風の跡淋し

九年十月十八日田中お笑さん一周忌

山寺の鐘の音淋し秋のくれ

十一月三日洛趣會嵯峨大覺寺に催して故人の法要を營む

五佛を偲ひて秋の集ひ哉

神尾石臍氏を弔ふ

法燈のゆるゝも淋し初時雨
惜まれて〳〵て散る一葉哉

中山神社の三八會風爐先に芽生松八本と三本とを書きて

月雪も花も美やひの集ひ哉

高坂三之助翁古稀を祝して

家も名も咲き擴こりて翁艸

廣岡伊兵衛氏母堂悼

桐一葉散りて淋しき菴の窓

六つの家畑氏の木屋町へ轉居を祝して

川岸の灯の更けて千鳥を聞く夜哉

丸窓に二人の影や玉子酒

名古屋古田雪香佛弔

颱風に松も倒れて淋しかり

九年十月閑聲會に謠本見台揃を調製出來したる故小生書と各名前讀込みの俳句を認む

石野閣下　書　鏡板松

石不動寂ひて尊とし野の清水

細江氏　紅葉と松葉

細溪の流れて秋の江にそゝく

中村氏　梅

中次の茶器に銘あり村雨と

重本氏　餅花と福壽艸

重寶な本を送りて御年玉

林氏　羽箒と香合

林間に寶藏も見ゐて初時雨

畑氏　百々世草

百までも生く勢ひや畑打

三田村氏　稻

三國の田を見廻りし村の長

田中氏　澤瀉に九十九草

田植笠中に尋ぬる人ありて

上尾氏　櫻

上浪に尾上櫻の散りて來し

上野　銀杏に松葉

爐開きや菴主持出す上野燒

句佛上人還暦祝句　其德は宇宙に響き風薰る
鶴も來て巢籠る松の綠哉

滿州國皇帝御來朝　蘭薰る武庫離宮の貴賓室
行幸を迎へる御座所蘭薰る

芭蕉堂花供養　山を脊の菴や花の眞盛り

城南會笠置行き終日春雨
行宮の遺跡訪ふ日を春の雨

十年二月丸紅店考案部の催し山口縣陽田町松の家旅館にて
温泉に入りて足伸す窓に梅薰る
柚子の實の色は映えけり濱の家

龜山公園にて六躰の銅像を見て
龜山の名にちなみてや六躰の
銅の御姿春風そふく

秋芳洞にて　秋芳の洞の凄さや春寒し

十年四月紙屋川圓町橘花山莊
鳴く蛙氣儘に向きし家多き

四月廿日洛西御室奥延氏別邸花中園
仁清の寵跡訪ふ日花さかり
袖摺の櫻盛りを裳趣苑

堀川女學校々長野田一郎先生の歐米巡遊を送りて
繙かは文化の華に風かをる

外遊中女生徒の送りし便りを讀みて
夏菊の匂ふや海の外までも

六日會六月並友禪齋二百年に因みて梅の宮にて開卷
ユウセ
ムキ　夏季八方折
二百年
年よりは若く見えたる浴衣哉

むつかしき人と云はれて黄帷子
振りもよく水あけもよし百合の花
むつましき夕餉の膳や胡瓜もみ
百万の野球に汗のファン哉

山科毘沙門堂にて丸紅店美展發表會の節參會して

池水に映るつゝじの風情哉
國寶の軸も尊く五月晴
拐香爐持つ袖風の薫りけり

加賀金澤寶圓寺に友禪齋二百年祭に參りて

寂まさる友禪の碑や夏木立
紫陽花の雫美くし二百年
其德は末世も朽ちず苔の花
夏木立偉德を偲ふ師の墓前
香煙の昇る御堂や時鳥

龍國寺にて

奉る心の花や二百年

六月廿八日染織商工新聞社友禪史料展に

友禪の史料觀る日を梅雨最中
五月雨や加賀友禪の偲はれて

六月廿九日京都大水害各方面より水見舞を受けて

友人の情けは厚し水見舞

田中氏西坂專慶流の花を見て

夕立や傘かる人の花も見て

七月二十五日神戸輸出友禪商組合記念展に

外國に大和撫子匂ひけり

八月三日繩手三條養福寺にて田中美風氏追悼座談會詠草

君を知る三十一年もなりつらん
今は淋しく語るよしなし

露光量違いの為重複撮影

辻田公記氏令閨弔　儚さを偲ふ夜更けや虫の聲
見るものは皆思出や土用干

高山與三吉氏悼　暑き夜をあまりに早き一葉哉

親友三宅榮三郎氏兩親の五十回忌法要記念品を贈らる

ふた親の去りにしあとは小車の
壹萬八千日もめぐりて
二葉散るあとは夢なり五十年
香炷いて魂祭る日の暑さ哉

山口榮三氏長女死去に供ふ

つぶれたる玩具もありし殘暑哉

伊保木源太郎氏悼　あまりにも早き一と葉やむし暑き

百世庵三圓宗匠息實氏開店を祝して

正直な舗は榮へて夷講

露光量違いの為重複撮影

辻田谷二氏令閨弔　涼しき夜更けを虫の聲
思ふ　思ひ出や上用干　背思出や上用干
高山與一吉氏宅　冴き夜更けを虫の聲
親戚二人　榮三郎氏訃報　有り難き一葉哉
　　法要記　謹弔申る
　　た親の上のにしおとは小車の
　　宮詣八千日ちめぐりて
　　つ菓子あるおとは夢なり五十年
　　香炷いて祭る日の暑さ哉
山口榮二氏長女死去に供ふ
　　つ　れに一玩具もありし殘暑哉
伊保木源太郎氏宅　ちまたの中きゝて葉やむし暑き
白世瓶二郎宗博息子氏開店に寄せて
　　正直な舗は栄へて夷講

昭和十一年五月一日印刷
昭和十一年五月四日發行　（非賣品）
京都市中京區猪熊通三條北入
姉猪熊町三百十五番地
編輯發行者　上野清江
電話本局四九七二番
京都市下京區寺町通松原上ル
京極町五百一番地
印刷者　關好策
電話下局四六八七番
京都市下京區寺町通松原上ル
京極町五百壹番地
印刷所　關進行堂
京都市中京區猪熊通三條北入
姉猪熊町三百十五番地
發行所　上野芦廼家

終